

(2) 事業内容

施策1 体力・学力を高める教育・保育の推進

1 運動の楽しさを感じる取組の充実（教育研究所）

● 現状と課題

子どもの発達において運動は重要です。健康の保持増進、体力・運動能力の向上をはじめ、学力との相関も認められています。また、主に幼児期には集団の遊びや運動によって非認知能力※が養われると言われています。しかし、生活環境の変化や新型コロナウイルス等の影響により、運動する機会や時間は減少傾向にあり、体力や運動能力の低下が懸念されています。また、近年では、積極的に運動する者とそうでない者の二極化が見られ、スポーツする機会の格差を通じて、体力格差や意欲格差が生じています。幼少期から体を動かすことを楽しむ取組を行い、運動やスポーツに親しむ機会や場を提供していくことで、運動習慣を身に付けていくことが必要です。

※非認知能力・・・意欲、協調性、粘り強さ、忍耐力、計画性、自制心、創造性、コミュニケーション能力といった、測定できない個人の特性による能力全般

● 具体的な取組

(1) 運動の楽しさを味わう機会の提供（ACP※、たじっ子CityCup(仮称)等）

子ども達が「運動が好き・楽しい」と感じるよう、楽しみながら積極的に体を動かす「ACP」や、多治見市内の小・中学生等を対象に、多様な種目の記録をネットで登録して競い合う「たじっ子CityCup」等を実施します。また、各種団体等と連携し、子ども達が体を動かしたりスポーツを体験したりする場を提供します。

※ACP（アクティブ・チャイルド・プログラム）・・・子ども達が楽しみながら積極的に体を動かすプログラム

(2) 幼稚園・保育園での「いきいき運動遊び」の充実

幼児期には集団遊びやリズム遊び、サーキット遊び等、体を動かすことの楽しさを感じる取組を推進します。

(3) 豊かなスポーツライフの実現に向けた保健体育等の充実

生涯運動に親しむ素地を育むため、保健体育の授業や行事等で「運動が好き・楽しい」と感じるような活動を行います。

● 計画の成果目標

成果指標	現状（令和4年度）		目標（令和9年度）
「運動やスポーツをすることが好きですか」の質問で「好き」と回答した割合 （「全国体力・運動能力、運動習慣等調査※1」の質問紙）	＜市＞ 小学校(男) 63.4% 小学校(女) 50.8% 中学校(男) 61.1% 中学校(女) 42.5%	＜国＞ 67.9% 53.1% 60.6% 43.0%	小・中学校、男女とも 全国平均より「好き」と 回答した割合が高い
全国と多治見市児童生徒のTスコア※2 の比較 （「全国体力・運動能力、運動習慣等調査」）	＜市＞ 小学校(男) 小学校(女) 中学校(男) 中学校(女)	＜国＞	小・中学校、男女とも 全国平均を上回る

※1 全国体力・運動能力、運動習慣等調査・・・毎年実施される小学校5年生、中学校2年生対象の体力等の調査

※2 Tスコア・・・全国平均値を50とした場合の尺度

2 主体的・対話的で深い学びの実現（教育研究所）

●現状と課題

「全国学力・学習状況調査（対象：小6、中3）」の教科（国語、算数・数学）における多治見市児童・生徒の平均正答率は、全国と比べ中学校でほぼ同等か少し高く、小学校はほぼ同等です。一方、同調査で「教科（国語、算数・数学）の勉強が好き」と回答した児童・生徒の割合は、全国平均よりやや低い割合となっています。子ども達が、学ぶことに興味や関心を持ち、様々な人や物事から自分の考えを広げ深める学習を通して、未来をたくましく生きていくために必要な資質・能力を身に付ける授業が求められています。それにより、「学ぶことが楽しい」「仲間と学んでよかった」と子ども達が実感することで、「教科の勉強が好き」という思いが醸成され、さらに自ら学び続けようとする態度につながっていくことが大切です。

●具体的な取組

（1）集中力や自信を高める幼稚園・保育園の「いきいき遊び」の実施

幼児期から、物事に興味・関心をもったり集中力を育んだりするための「いきいき遊び」を実施します。「テンポ・スピード・タイミング※」や様々な感覚を高める遊びを、各園で創意工夫して取り組みます。保育者の適切な認め励ましの中で、子ども達が自信を高めていけるようにします。

※テンポ・スピード・タイミング・・・出題された絵に関する指示をテンポよく順番に回答する。

（2）学ぶ意義や喜びを味わう授業の充実

主体的に学び続け、児童生徒が「学ぶことが好き」と感じることが出来る授業づくりを行います。また、ICTを効果的に活用し、個に応じた指導や学習方法の充実を図る「個別最適な学び」や、多様な他者と関わり合いながら高まる「協働的な学び」を推進していきます。

（3）学力調査を活用した指導改善を図る学力向上推進研修会の開催

各学校では、学力調査等の結果からこれまでの指導の成果や課題を明らかにし、次への指導改善に取り組んでいます。学力向上推進研修会では、小学校から中学校まで継続して取り組むことを重点化し、子ども達が力を付ける授業づくりに生かします。

●計画の成果目標

成果指標	現状（令和4年度）		目標（令和9年度）
「教科の勉強は好きですか」の質問で「好き」と回答した割合（「全国学力・学習状況調査※」の質問紙）	【国語】〈市〉	〈国〉	【国語】〈市〉
	小学校 18.4%	23.4%	小学校 40.0%
	中学校 15.8%	24.2%	中学校 40.0%
	【算数・数学】		【算数・数学】
	〈市〉	〈国〉	〈市〉
	小学校 36.8%	36.2%	小学校 40.0%
	中学校 29.3%	29.9%	中学校 40.0%
国語、算数・数学の平均点（全国学力・学習状況調査）	【国語】〈市〉	〈国〉	全国平均より多治見市の平均が高い
	小学校 63.0 点	65.6 点	
	中学校 71.0 点	69.0 点	
	【算数・数学】		
	〈市〉	〈国〉	
	小学校 61.0 点	63.2 点	
	中学校 53.0 点	51.4 点	

※全国学力・学習状況調査・・・毎年実施される小学校6年生、中学校3年生対象の学力等の調査

3 情報活用能力の育成（教育研究所）

●現状と課題

令和3年度に児童生徒に一人一台タブレットを配備し、授業や家庭学習で活用しています。各校での積極的な取組により、「学習でタブレット端末などのICT機器を使うことが勉強の役に立っている」と考える児童生徒の割合は高まっています。Society5.0※といわれるこれからの社会を生きていく子ども達には、活用に関わるルールについて話し合ったり、ICT機器の利用について考えたりする機会を設け、情報に関する権利やその重要性を認識していく必要があります。そのために、教職員のICT活用能力をさらに高めることも望まれます。

※Society5.0・・・サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する、人間中心の社会（Society）

（参考：Society1.0（狩猟社会）、Society2.0（農耕社会）、Society3.0（工業社会）、Society4.0（情報社会））

●具体的な取組

（1）生きる力を育むデジタルシチズンシップ※教育の実施

児童生徒自らが情報に関する権利とその重要性を認識し、責任をもって適切に情報を扱い学習する姿勢を育成するため、デジタルシチズンシップ教育を推進します。

※デジタルシチズンシップ・・・情報技術の利用における適切で責任ある行動規範

（2）ICT教育推進員による児童生徒及び教職員への支援の実施

ICT教育推進員が各学校を巡回して授業支援や技術的な支援をします。特に小学校低学年への基本的な操作支援や、教職員への個別支援に重要な役割を果たします。

（3）「学校情報化認定」基準に沿った情報化の推進

学校の情報化を促進するための指標として、日本教育工学協会が総合的に学校の情報化を進めたと認定する「学校情報化認定」において、「学校情報化優良校」の認定を受けることを推進します。

（4）「ICT活用ガイドブック for Teachers」の活用

教職員のICT活用能力を高めるため、「ICT活用ガイドブック for Teachers」（令和3年度作成）を随時更新し、授業での効果的なICT活用を推進します。

●計画の成果目標

成果指標	現状（令和4年度）	目標（令和9年度）
「学習の中でPC・タブレットなどのICT機器を使うのは勉強の役に立つかと思いますか」の質問で「役に立つと思う」と回答した割合 （全国学力・学習状況調査の質問紙）	小学校 70.5% 中学校 62.0%	小学校 80.0% 中学校 70.0%
「学校情報化認定」で「学校情報化優良校」と認定された学校数	11校	21校

4 食育による健やかな心身の育成（食育推進課）

● 現状と課題

成長期の子ども達が健全な食生活を送るには、食に関する知識を深め、望ましい食習慣を身につける必要があります。しかし、食に関する価値観や暮らしの在り方が多様化する中で、健全な食生活を実践することが困難な場面が増え、子ども達の食の乱れや健康への影響が見られています。

そのため、学校と家庭が連携し、子ども達への食の指導に継続的に取り組むことや、学校給食での地場産物の活用によって食に関する感謝の念や地域への愛着を育むことが重要です。また、SDG s（持続可能な開発目標）を意識することも必要です。

● 具体的な取組

（1）安心・安全で魅力あるおいしい学校給食の安定した提供

安全な食材選びや、行事食・郷土料理など季節感のある献立を取り入れ、手作りを大切にした安心・安全でおいしい給食を提供します。

（2）望ましい食習慣を身に付けるための学校・園での食に関する指導の充実

食に関する正しい知識や望ましい食習慣を身につけるため、学校給食を「生きた教材」として活用することや食に関連した各教科の学習などを通して食育を積極的に実施します。

（3）地域への感謝の気持ちを育むための市内産農産物の活用

食に関する感謝の念や地域への愛着を育むため、学校給食の食材に市内農産物を活用します。

（4）家庭への食に関する啓発

SDG s の考え方を踏まえ、教育委員会、学校・園、家庭が連携協力して、P T A等保護者へ向けた食育講座を実施します。

● 計画の成果目標

成果指標	現状（令和4年度）	目標（令和9年度）
毎日朝ごはんを食べる子の割合	93%	100%
アレルギー除去食対応校	52%（11校/21校）	100%
市内産農産物の活用回数	0回	5回
P T A等保護者へ向けた食育講座の実施回数	3回	8回